協定校で国際シンポジウム

社会知性開発研究センター

アジア産業研究センター

小林教授の報告を熱心に聴講するUTCCの教員、学生ら

バンコク・UTCCで――投資環境の現状を報告

社会知性開発研究センター／アジア産業研究センター（研究代表：小林守商学部教授）の国際シンポジウム「メコン地域のビジネス発展」が9月5日、バンコク市のタイ商工会議所大学（UTCC）で開催された。組織間協定校であるUTCCとの共催で行われた。

ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマーのメコン地域5カ国とASEANを中心とした関連周辺地域の市場分析をテーマとするプロジェクトの5回目のシンポジウム。

UTCCからはラダワン・レクマット准教授と中小企業センターのプサディー・ポルサラム所長がそれぞれタイ、ミャンマーの中小企業経営に関するアンケート調査に基づく報告を行った。本学からは小林教授と岩尾詠一郎商学部教授がメコン地域の東西経済回廊や南部経済回廊周辺地域に関わる投資環境とロジスティクスの現状を報告した。

進行は内野明商学部教授。本シンポジウムの会場にはUTCCの教員、学生ら合わせて約100人が訪れ、熱心に耳を傾けた。

本学のアジア産業研究センターとUTCCの経済ビジネス予測センターは2015年から国際交流組織間協定を結んでおり、この協定を足掛かりにして今回のシンポジウムが実現した。このシンポジウムを受けたUTCCからは、研究交流のみならず学生の交換留学などを含む本学との一層の協力関係の拡大に期待が寄せられた。

翌6日には大崎恒次商学部准教授も参加し、UTCCの紹介でタイ商工会議所の幹部で経営者の2人を招いた情報交換会が開催された。この会合では、タイ側からベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーを結ぶ東西経済回廊メコン地域を中心としたエリアへの日本企業による一層のビジネス展開を期待する意見などを聞き取ることができた。

（小林守）

ソーシャル・ウェルビーイング研究センター

10月13日の国際シンポジウムは会場を埋め尽くすほどの参加者が来場

ハノイ・VASSで――社会比較基に議論展開

社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究センター（研究代表：原田博夫経済学部教授）は、第2回国際コンファレンスを「地域統合におけるソーシャル・ウェルビーイング：統合ASEANモデルを目指して」と題して、10月12、13の両日、ハノイのベトナム社会科学院（VASS）で開催した。

本プロジェクトは、発展著しいアジア各国でアンケート調査「ライフスタイルと価値観に関する国際比較調査」を行い、その現状をソーシャル・ウェルビーイング（SWB）の視点を通じて比較研究することが目的。さらにこの地域の大学・研究機関からなる国際的な研究コンソーシアム（共同体）の構築も目的に掲げている。

これまで日本、韓国、ベトナム、タイ、フィリピン、インドネシア、台湾でアンケート調査を実施し、データ分析を進めている。

1日目は、本プロジェクト関係者の研究報告が行われ、7カ国から28人が参加した。アンケート調査によって収集されたデータを用いた社会比較を行い、学術的に極めて高度な議論が展開された。2日目は、一般参加者向けの国際シンポジウムが行われ、90人が参加した。ダン・グエン・アインVASS副院長および原田代表による開会のあいさつに続き、ASEAN各国の統合や開発、またSWBについての東アジア諸国との比較など、今後のアジア社会を考えるうえで興味深い報告が相次いだ。

本学からの登壇者は次の通り。原田代表、金井雅之人間科学部教授、嶋根克己同教授、飯沼健子経済学部教授、稲田十一同教授、村上俊介同教授、ポストドクター矢崎慶太郎氏。

本学とVASSは今年5月に国際交流協定を結び、今後一層の研究協力が期待される。次回の国際コンファレンスは2018年3月にインドネシア大学を共催とし、同国ジョグジャカルタで開催予定である。

（嶋根克己）

フランスで論文発刊

ミシェル=ベルンシュタイン文庫

ベル文についての近江代表の論文を掲載した書籍。中央が昨年末刊行された『仏革命を収集する』

本学が所蔵するフランス革命関連史料群「ミシェル=ベルンシュタイン文庫」（ベル文）について、研究の本場フランスでの情報発信が進んでいる。仏革命のまとまった史料数としては仏国立図書館に次いで世界第2位とされるベル文に、各国の研究者からの注目が増している。

本学仏革命史料研究センター（代表・近江吉明文学部教授）は長年、ベル文の調査・研究を進めてきた。2015年には近江代表が仏での国際シンポジウムに出席。ここでは世界各国の文書館・研究所などが所蔵する革命関連史料の概要を示し、研究にどのように貢献するか議論した。ベル文について参加者からは「極東の一私大になぜ膨大なコレクションがあるのか」といった質問や、ベル文の活用方法についても意見が出された。

このシンポジウムでの報告をまとめた『仏革命を収集する』（原題Collectionner la Révolution française）が昨年末、仏で出版された。近江代表の論文も掲載されている。

ベル文には仏にはない史料が存在しており、新しい革命研究の可能性を高める、と近江代表。シンポジウムでは、ベル文に特化した国際研究大会の開催を求める声が各国の研究者から上がり、近江代表は「社会知性の国際的発信を実行できる」として実現を目指す。

□□□

ミシェル=ベルンシュタイン文庫　仏の古書籍商ミシェル=ベルンシュタイン（1906～2003年）が四十数年かけて収集した仏革命史料。本学が創立百年記念事業として1977年に一括購入した。仏革命期に印刷された史料や手稿史料4万7000点以上からなる。

図書館秋の企画展「北斎と馬琴」

迫力 読本の世界

図書館秋の企画展「北斎と馬琴」が11月1～13日、生田キャンパス図書館本館で開催された。

江戸時代を代表する浮世絵師・葛飾北斎と、今年生誕250年を迎えた読本（よみほん）作者・曲亭馬琴がタッグを組んだ読本と、馬琴ゆかりの浮世絵計約50点を展示した。読本は文章が主体の伝奇小説。本学が所蔵する江戸期の戯作コレクション向井信夫文庫から出展した。

北斎と馬琴が、才能をぶつからせながら生み出した読本は13作品あるが、本展示ではこのうち同文庫に収められた10作品を取り上げた。

江戸の長編読本の定型を作ったとされる『椿説弓張月（ちんせつゆみはりづき）』、圧倒的な画筆で表現した『新編水滸画伝（しんぺんすいこがでん）』、見開きいっぱいに書かれた怪鼠の描写が冴えわたる『頼豪阿闍梨恠鼠伝（らいごうあじゃりかいそでん）』など。現在の漫画やアートにもつながる迫力あふれる表現に学生らが見入っていた。

迫力ある波の表現が目を引く『椿説弓張月』などが展示された

11月25、26の両日、神田キャンパス5号館でも展示する。入場無料。

専修人の新しい本

写真で読む三くだり半

高木侃著

「三くだり半」は夫婦の縁を切るときの離縁状のことで、江戸時代、三行半（みくだりはん）で書くならわしとなっていたことからその名がつく。離婚宣言と相手の再婚許可が記されている。

本書は、離縁状の研究半世紀になる著者が収集した1300通から選んだ約100通の「三くだり半」の文書を写真で紹介。釈文と現代表記による読み下し文をつけて解説し、悲喜こもごもの男女の離別を描き出した。

三くだり半は、夫が一方的に妻へ渡す印象が強いが、夫が妻から「返り一札」（受取証）をもらうことで協議の伴う熟談離婚もあり、妻の飛び出し離婚や婿養子を追い出す女房もいた。

本書から江戸時代の離婚事情が読み取れる。

（日本経済評論社・本体3200円＋税）

著者（たかぎ・ただし）＝元法学部教授、専修大学史編集主幹。日本法制史。